

近江商人

近江商人の信条は、仏教や儒学の影響を大きく受けている。

商いは儲けるためだけではない。世間さまのお陰で商いをさせていただく。

商売で世の中のために役立たせていただく。という感謝の心と使命感が根底にある。中江藤樹や鈴木正三らの教えの影響も大きい。

商人としての智恵と掟があった。店そのものが商道学校であった。数百年も存続するには、そこに培われた商売の哲学があればこそだ。

(16)

輝け 商店街

近江商人の道・4

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

江戸期以降、近江商人の全国出店が盛んになる。先に掲げた表「日野商人の出店」のとおり（専門店六月号掲載）、満田良順さん（近江日野商人館長）の調べでは、日野出身の商人の県外出店は八八六店を数え、関東方面が六〇〇店と最も多い。続いて、近畿方面に一一一店、東北、北海道に各三〇〇店以上、九州に二八店、海外にも一七店が進出している。

合資形態（乗合商）と出店展開

初代の矢野喜兵衛（一七一―一七八四）は、正徳元年に蒲生郡中在寺で生まれ、幼い頃に同郷の矢野新右衛門家に奉公に入り、やがて、秩父にある出店の支配人となった。

寛延二年（一七四九）に三九歳で別家を認められ、その後、秩父郡の大宮郷で酒株を借りて酒造業を興したが、その元手金は一二〇両、本家との折半出資の合資形態をとる、いわゆる乗合商であった。

地元の酒造道具を居抜きで借り受け、奉公人を送り込んで、少額の資本で多数の開店を可能にした。酒の販売は、店での小売りと売子による委託の両方を行い、多種

類の日用品を取り扱う、よろづ小売商や質屋も兼業した。

自らは日野の本店にいて、支店には支配人を置き、毎年、監督のために秩父の出店に出向いていった。店の基礎が固まった五〇歳で、ようやく結婚し、晩婚ながら三男一女を得て七四歳でこの世を去った。

一〇〇年引き継ぐ 合理性と信義

帳簿は、複式簿記の理屈にかなった方法で記帳するなど、合理的な経営をした。その一方では、使い古した反故紙や紙くずの類まで、こより縄に仕上げで再利用するなど、徹底した儉約ぶりであった。

四代目の喜兵衛は、主家に対して毎年一〇〇両を納めつづけ、出資に対する利益配当と出世の謝意を表した。さらに弘化二年（一八四五）

には、傾いた主家を救済するために、営業資金八〇〇〇両の半分を引き受けている。

開業してから、

すでに一〇〇年以上を経ているにもかかわらず、主家に対する当初の出資の価値を忘れず、さらに営業資金を寄付する信義の深さは、敬服のほかない。

商人哲学

異見之事 矢野喜兵衛

他所で働くものは
常に身持ち正しくせよ

他国に多く進出した矢野家では、そこで商いをする者の心得を厳しく論じている。

四代目矢野喜兵衛が、他国の出店で働く奉公人に対して、書き記した「異見之事」のなかで、次のように述べている。

「遠国渡世の身分は、地の商人



近江商人の帳簿
「近江商人物語（五個荘町）」から転載

と違い、身持ちまた格別に正しく有るべきこと』

自分たちは、その土地のものでなく、他所からやってきて商売をしているのだから、地元の商人衆とは、立場が違うことを、充分にわきまえていなければならぬ。

外来の商人は、日常の身持ちを正しくすること。他国者であることを、決して忘れてはならない。

蜂起軍も認めた徳目商人

徳目を重んずることは、初代の喜兵衛の開業以来から、ずっと貫かれたテーゼであった。明治一七年（一八八四）、秩父郡で数千人の蜂起がおきた。

松方デフレ不況のあおりをくって、養蚕・製糸を副業としていた農民が、借金地獄に陥り、高利貸しの支配下におかれた。生活苦に陥った農民たちが、高利貸しを焼き討ちし、秩父郡一帯を制圧した。

しかし、この地方でもっとも大きかった矢野家の大宮郷の店は、蜂起軍の打ち壊しの標的とはならず、襲撃をまぬがれた。日頃の矢野家の商いを、悪徳業者ではないと認めていたからだ。兵糧の炊き出しを依頼されたのみで、日常の

営業は保証された。

二世紀半・今も百貨店を営む

子孫は現在もなお、矢野百貨店として、埼玉県秩父市に健在で、「商道一筋二世紀半」を誇りに、次のように宣言している。

「寛延二年、初代矢野喜兵衛が、秩父の地に酒造業を興して二五〇有余年。黒船に揺れた幕末から明治への動乱の時代。敗戦の焦土から新しい国造りへと立ち上った、混乱と苦しみの時代。矢野はいつでも地域の皆様と共に歩んで参りました。平成の改革が声高に叫ばれる今も、お客様第一主義を理念に、さらに精進を続けてまいります」

商人哲学 見聞随筆・小林吟右衛門

他人方に不義理致さず 社会の一員の自覚を持つ

丁吟の初代・小林吟右衛門は安永六年（一七七七）、近江国愛知郡で生まれた。ささやかな天秤棒商いから身を起こして、京都や上方の織物を江戸に持ち帰り、ひたすら商売に励み、六〇歳のころには数万両の資産を築いた人である。

ちなみに、その子孫が今のチヨージン(株)で、本社を東京都日本橋掘留町におき、資本金四億円強、総合アパレルからホテルなど、幅広く経営している。

その対話を書き残した「見聞随筆」によると、大意は次のように述べている。

『たとえ天秤棒を担いだ小商人でも、自分のことばかりでなく、世の中の一員としての自覚を持って、不義理や迷惑をかけないように、絶えず周囲や世間の人々のことを思いやりながら、労苦をいとわず懸命に働くことだ。』

やがて、立派に商人として認められ、相当の身代を築くことができるとも、勤勉に加えて、幸運に恵まれることも大事だ。初めから欲にかられて、大金を願望しても、ムダで何の益にもならない』

すばやい情報伝達

丁吟は彦根藩と密接な関係にあった。藩の両替方御用達で苗字帯刀を許され、藩の政治活動も側面から支えていた。

素早い情報伝達力があり、緊急時の対策の手の打ち方は、みごとなものであった。桜田門外の変で、

大老の井伊直弼が暗殺されたのは、万延元年（一八六〇）三月三日のことだ。この情報が当事者の江戸藩邸から国元に届いたのは、七日の夜半であった。だが丁吟では、すでに同日の正午には京都店に速報が届いている。

事件発生後、直ちに幹部店員を同藩の桜田屋敷に詰めさせ、彦根藩へ調達金一万一〇〇〇両を用立てるなど、協力する一方、丁吟の営業も自粛し、注文品の江戸店下しを見合わせるなどを申達している（近江商人学入門・末永国紀から引用）。

情報伝達の速さと、非常事態にとられた危機管理体制的確さは、驚くべきものがある。

しまつて、きばる

各地区の近江商人に共通したものは「しまつて、きばる」である。「お気張りやす」というあいさつが、滋賀県では日常に交わされている。「お元気で精を出されて、なによりですね」といった、お互いの勤勉を喜ぶ共感が伝わってくる。

四代目、小林吟右衛門の生活信条をみると、『商法ヲ行イ候には前以法則ヲ定、取掛ルベシ、決断

早く、欲浅キ、朝起キ、辛抱腹八分」とある。こうした勤勉な生活態度を「きばる」という。

商人同士では、商売相手の利益を優先し、自らは薄利で商う。他の商人が嫌がる仕事も、進んでがんばるのが「きばる」である。

薄利でも節約して商いを継続していくことで、利益を積み重ねるのが「しまつ」だ。始末の語源は、始めと終わりの締めくくりをはつきりすること。始末してムダ使いをしない。有効に活かして使う。節約の土台には、もったいない、感謝して働くといった仏教思想が根ざしている。

もの惜しみをしたり、ケチることとを吝嗇りんしやくというが、それとは全く違ったものである。



左：天秤棒を肩に全国を行商した近江商人
右：戦前の薬の引札（広告）
近江日野商人館にて

商人哲学

商売は菩薩業

伊藤忠兵衛

商いは仏の道

近江商人と仏教は、深いかわりがある。特に、弥陀信仰が粘り強い商業活動を支えた。

「商いは仏の道」という強い信仰心があった。忠実に商いを重ねることが、自分自身が仏となる「菩薩業」であるという信念を抱いていた。

初代の伊藤忠兵衛は、たとえすべての事業や財産を失っても、信仰を失ってはならないと遺言している。

近江から越前にかけては、浄土真宗の信者が多い。その昔、京都を追われて越後に下った親鸞が、その道すがら「阿弥陀如来に帰依」することにより救われると説いた。今も、この地方には、たくさんのお寺があり、その信仰が深く根付いている。

人間を意識するしないを問わず、罪深いものである。念仏を唱え、阿弥陀仏を信じ参らせることにより救われる。善行を積んで、その

弥陀のご恩に報い奉ること祈るのである。それが苦しみの多いこの世を生きる、唯一の救いであった。

商いも、世のため人のためにさせていただく「菩薩業」である。生きるの自分力ではない。生かさせていたでいるのだ。他力にすぎない。人様のお陰で商いができるのだ。

伊藤忠は「商売は菩薩業」と信じ、店員の精神作興を仏教に求めた。親鸞聖人の「正信偈和讃」と教珠を持たせ、朝夕

仏壇に向かって念仏を唱えさせた。

善行を積み 社会に還元する

近江商人は社会的活動をくり広げた。その範囲は、治山治水、道路の改修、貧民の救済、寺社や学校教育への寄付など、実に幅広い。先にも述べたように、文化一二年（一八一八）に、中井正治右衛門は瀬田の唐橋の掛け替えを行い、その総額は今の金にして三〇億円にもなるという。

近年では、昭和一二年に伊藤忠兵衛商店（現在の商社「丸紅」）の古川鉄次郎専務が、故郷の豊郷



親鸞聖人の「正信偈和讃」

村に小学校を寄贈し、その総工費は五〇万円で、村の一年間の総予算の一〇倍に当たる巨額であった。アメリカ人建築家ヴォーリスが設計し、竹中工務店が施工し、当時「東洋一の小学校」といわれた。校舎は腐朽していて、早晚改築が必要であったが、農村不況が続く中で、村財政は窮乏していて、如何ともなす術がなかった。そうした中で、この寄贈は秀でた人物の養成と、故郷の子どもに誇りと希望を抱かせる一大壮挙であった。

落成式で伊藤忠兵衛は、「産を作ることが、極めて容易なことではないが、さらに困難なることは、

産をよりよく散ずる事である。まことにその崇高なる心情と、意義ある金の使途に対し、敬服の外はない」と讃辞を送った。

それらは、単なる売名や偽善ではない。そこには「陰徳を積む」という、仏教思想が生きている。

陰徳を積む心理

このように近江商人たちは、進んで社会的な奉仕に勉めたが、そこには長年にわたって養われてきた、仏教思想が大きな影響を与えている。

仏教には「天の蔵に陰徳を積む」の教えがある。善行は隠れてするもの。人の心に善行の蔵を積み、そういつた教えがある。

「陰徳善事」とは、人に知られないように密かに善行を施すという、中国の淮南子（えなんじ・春秋時代）が人間訓のなかで述べていることばだ。

成功した事業家が売名行為でなく、人知れず社会のために善行をする。正当な利益を社会奉仕のために散財する。陰徳善事は、結果として生きた金を使うことになる。

近江商人には、商いで得た利益を、世の中に還元するという考え

があり、これを一つの理想としていた。

一つには、商いは人様のためという宗教心があった。自分がしている商いは、単に自分のためにする利益獲得ではない、少しでも人様のためにならせてもらう、喜んでいただく、これは仏の道に通ずるのだ、という浄土信仰に根ざっていた。

いま一つは、閉鎖的な時代に、他国に分け入って商いをするには、その地域に貢献し、信頼を積み重ね、人々に受け入れられることが必要だったのである。

商人哲学

商人の知らざる善行を行う
中江藤樹

中江藤樹の陰徳の教え

近江商人の理想像には、中江藤樹（一六〇八〜四八）の教えが大きな影響を及ぼしている。

中江藤樹は江戸時代初期の儒学者で、近江国高島郡神小川村に生まれた。

年若くして大洲（愛媛県）の藩士となり、儒学を教えるが、母親に孝養を尽くすため故郷の高島に戻

り、日本で最初の私塾・学校を自宅で開く。熊沢蕃山をはじめ、数多くの有能な士を生んだ。日本の陽明学の始祖であり、数多くの徳行から没後「近江聖人」と称せられた。

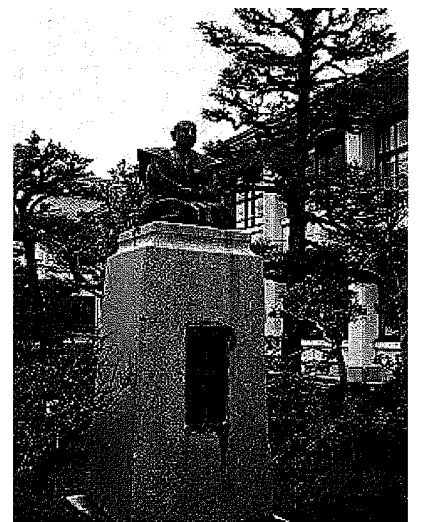
藤樹は「人の知ら

ざる善行をおこなうこと」を説いた。これを陰徳と言いい、近江商人にも受け継がれている。

先にも述べたように（専門店六月号）、近江商人の中井良佑の「金持一枚起請文」にも、陰徳事業の重要性が記載されている。「総じて善をなすには、ひそかに人の知らざるようにとりなすを第一とす。少しでも、人に知られんと思はば満心なり。満心はかならず魔縁となる。魔縁あれば必ず魔障あり（鑑草）」と説いている。

地元根付く徳目教育

藤樹の教えは、今もなお広く滋賀県一円に伝えられている。郷土の誇るべき先人として、その遺徳を偲び、学校教育にも広く取り入



近江聖人と尊敬される中江藤樹の像
日野町大窪の日野小学校の正門にある

れている。日野町の日野小学校の正門前に、藤樹の銅像が置かれていて、朝な夕な、登下校の児童たちが仰ぎ見ながらその前を通る。

高島市には藤樹の里文化芸術会館があり、今年が藤樹先生の生誕四〇〇年に当たするため、二〇年九月二一日の市民劇「藤の樹と風」など、多くの記念行事が行われる。滋賀県の地元では、近江商人が歩んできた姿を教材に活かしている。戦前の国定教科書には、塚本定右衛門や松居遊見、高田善右衛門などの近江商人が、質素儉約や自立自営し、刻苦勉励した徳目を教え、特に副読本を作成して、近江商人の足跡を習わせていた。今も学習の一環として、近江商人の社会貢献やベンチャー精神が取り上げられている。